大分市歴史資料館年報

（平成17年度）

2006

はじめに

大分市歴史資料館では、市民の皆さんに親しまれる資料館として利用者の声を反映させながら、よりよい資料館活動をめざしてさまざまな事業を実施しています。

まず、展示事業としては、年４回のテーマ展示と年１回の特別展があります。テーマ展示では、第１回「国際貿易港―府内沖の浜」、第２回「歩兵47連隊　日中戦争写真展」、第３回「野津原・佐賀関の歴史と文化財」、第４回「鶴崎今昔」を開催しました。とくに地域に密着したテーマで第３回と第４回で展示を行いました。

第24回秋季特別展「都へのあこがれ―戦国・織豊期の大友氏と豊後」では、戦国時代の豊後府内を描いた府内古図や近年の発掘調査で発見された出土品をはじめ、大友氏と都との政治・文化における関わりがうかがえる絵画や文献・考古資料の約130点を展示しました。

また、教育普及事業では、大人（高校生以上）、親子、子供向けの各種講座（体験講座）を開催しています。まず、大人向けのふるさとの歴史再発見講座では、歴史（９回）、考古（９回）、民俗・文化史（６回）、古文書（９回）の４コースを開講し、小・中学生を対象とした子ども歴史教室では、縄文土偶作り、大友氏館跡発掘体験、土器の接合体験、縄文土器作りと土器野焼き体験を実施しました。さらに、ふれあい歴史体験講座では、管玉・丸玉・勾玉・埴輪作り・土笛作り・火起こし体験などを行っています。

新しい事業としては、「移動歴史教室」と名づけた出張体験活動を企画し、職員が依頼のあった学校へ出向き体験学習の指導を行うようにしました。

これら様々な事業をとおし、大分の歴史遺産を生かし市民とともに創る歴史資料館を目標に掲げ、市民が身近に感じる資料館として一層の充実をはかっていきたいと思います。

今後とも、広く各方面の皆様にご支援とご指導をよろしくお願い申し上げます。

平成18年６月30日

大分市歴史資料館
館長　讃岐　和夫

目　　次

展　　示 …… 1
テーマ展示　特別展示
講演記録 …… 6
資料調査 ……18
資料収集 ……19
教育普及活動 ……24
平成17年度大分市歴史資料館研修報告 ……29
上野ヶ丘中学校教諭　志賀　良史
図　　書 ……31
資料館利用状況 ……38
管理及び運営 ……40
歴史資料館協議会　組織・事務分掌・職員・歳入歳出
施設管理業務の内容
施設の概要 ……42
条例・規則 ……44
利用案内 ……50

展　　示

(1)テーマ展示

本年度は以下の内容のテーマ展示を開催した。

第１回　国際貿易港－府内沖の浜

会期　４月16日（土）～６月26日（日）
開催日数：62日　入館者数：3,667人

戦国時代、国際貿易として栄えた豊後府内。ポルトガルや中国の貿易船が入港し、陶磁器に代表される海外の品々が陸揚げされたのが府内に隣接した沖の浜港であった。しかし、遠くヨーロッパまでその名が知られた沖の浜であったが、1596年に豊後を襲った大地震と津波により、海底に沈んでしまった。

本展では、絵図や文献、考古資料などから国際貿易港として賑わいをみせ、海没後「瓜生島伝説」を生んだ沖の浜の実態にせまった。

主な展示品　浦上宗鉄書状(個人・大分県立先哲史料館寄託)／府内古図（安部征二氏）／中世府内町遺跡出土外国製陶磁器(大分市教育委員会)／華南三彩貼花文五耳壷(当館)／「柴山勘兵衛記」(大分県立図書館)／原村絵図(当館)

第２回　歩兵47連隊－日中戦争写真展

会期　７月９日（土）～10月16日（日）
開催日数：86日　入館者数：5,594人

平成17年は太平洋戦争終結60周年にあたる。太平洋戦争の遠因となったのが1937（昭和12）年７月７日盧溝橋事件に端を発した日中戦争であった。大分市に置かれた歩兵47連隊も、この二つの戦争に動員され、各地で激戦を戦い、多くの兵士が戦死・負傷した。

当館では日中戦争に動員された大分市の秦皐月さんが撮影した記録写真の寄託を受けている。秦皐月さんは写真店で働いていた腕を買われて写真班を命じられ、兵士として戦いながら、47連隊の戦闘を写真に記録し続けた。

本展では主要な戦闘写真や戦場での生活を写した写真などを紹介し、戦争の悲惨さと平和の尊さを考える機会とした。

また、寄託者の秦正昭さん（皐月さん長男）の好意により、兵士個々人を写した肖像写真のを親戚など希望する関係者に配布した。

主な展示品　日中戦争記録写真41点／部隊別写真51点／秦皐月さん愛用のカメラ／千人針／出征用日章旗

第３回　野津原・佐賀関の歴史と文化財

会期　12月３日（土）～１月29日（日）
開催日数：43日　入館者数：1,362人

平成17年１月１日、大分市・佐賀関町・野津原町が合併し、新しい大分市が誕生した。本展はこの合併１周年を記念し、野津原地区と佐賀関地区の歴史をそれぞれの地元に残る資料や文化財で紹介した。

主な展示品　野津原黒山遺跡出土縄文土器(別府大学附属博物館)／加藤清正書状(大分県立先哲史料館)／野津原城絵図(稙田幹夫氏)／工藤三助画像(工藤健一氏)／築山古墳出土遺物(築山古墳保存会)／若林文書(若林ヤスエ氏)／関手永絵図(高橋五郎氏)／細川綱利社領宛行状(早吸日女神社)／貝仙屈貝殻コレクション(小野清次氏)／太田缶詰工場貝ボタン商品見本(太田寛泰氏)

第４回　鶴崎今昔

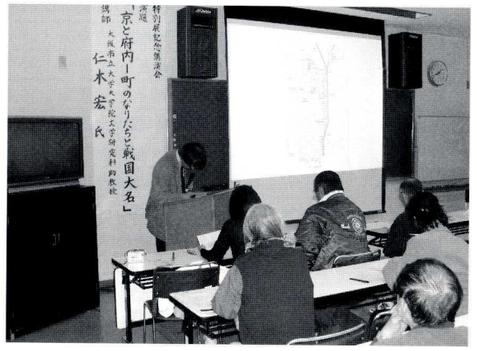
会期　２月４日（土）～４月２日（日）
開催日数：49日　入館者数：3,898人

鶴崎は大野川河口に位置し、古くから海上・陸上交通の要衝であり、江戸時代は熊本藩の海の玄関口となった。本展では、江戸時代から昭和時代までの鶴崎地域の歴史を地元に残るさまざまな資料で紹介した。

主な展示品　蛇の目紋入り食籠(当館)／波奈之丸屏風[厳島神社図](首藤規行氏・当館寄託)／維新前鶴崎町全景図(得丸善之氏)／鶴崎町北川商店引札(杉田正二氏)／鶴崎町地図(袖清一氏)

京と府内―町のなりたちと戦国大名

大阪市立大学大学院文学研究科助教授　仁　木　　宏



記念講演会の様子

こんにちは。今ご紹介いただきました仁木です。私は、京都は研究していますが、豊後府内は全然研究していませんで、三年ぐらい前に初めて来させていただきまして、その後２回来まして、今日は４回目ですので、まだまだ素人です。多分、聴衆の皆さんの方がずっと府内のことについては詳しいのではないかと思って内心びくびくしています。せっかく話をしろということですので、本当に俄か勉強ですが、最近の発掘調査の成果とか、豊後府内につきましては木村幾多郎館長や今日もお見えの鹿毛敏夫さんが文献の方で研究されていますので、そういうこれまでのご研究も参考にさせていただきました。京都の方の話はそれなりに自信を持っていますが、府内の方の話は何分今申しました次第ですので、いい加減なことを言うかもしれません。後で誤っている点をご指摘いただければと思います。それではレジュメに従って話をさせていただきます。

【はじめに】

まず、「はじめに」というところから入っていきたいと思います。

私自身も三年前にこちらに来るまでは、はっきり言って大友という戦国大名については余り大したイメージを持っていませんでした。キリシタン大名だということは勿論存じていました。「文弱」という、言い方としては激しいかもしれませんけれども、そういうイメージも無きにしもあらず。実際に全国的に大友氏とか、大友宗麟というと、そういうイメージもあるのではないかと思います。

改めて説明するまでもないかと思いますが、天正６年（1578）に耳川の合戦で島津軍に大敗して、その後天正14年に島津によってこの府内が陥落し焼き討ちにあっているということ。さらに義統が文禄２年（1593）に文禄の役の不始末で豊臣秀吉の怒りを買って除封されてしまう。その数年後には断絶となりますので、余り立ち回りのうまくないというイメージがあります。それと、キリシタンにうつつをぬかし、文化ばかりに力を入れ、時代の先行きが読めなかったというイメージがあるのではないかと思います。

この大友氏の城下町である豊後府内につきましても、今回の展示のコンセプトがそうだと思いますが、京都風だということです。これは一般に言われています典型的な戦国期城下町とはだいぶんイメージが違うということだと思います。

いわゆる一般的な戦国期城下町のイメージとは、とても強い大名権力が家臣団とか都市の民衆とかを強く統制するというもので、これは信長の安土、それから秀吉の大坂、家康の江戸、さらには近世の城下町へと続いていく。こういう近世社会へと展開していく主要なルートには乗っていない、そういう京都風の城下町であると思います。ですから下手をすると、そうした町づくりをしているから島津氏にやられるし、秀吉に滅ばされるのだという議論になりかねないのではないかと思っています。

ただ、私自身も果たして戦争に強いということ。或いは家臣団を厳しく統制するということ。これは勿論戦国大名にとってとても大事なことですが、それのみで現代人である我々が戦国大名というものの価値判断や評価をして良いのかどうか。つまり最終的な勝ち組みのところだけに評価を集中させて、そうでない大名というのは負け組みだという言い方で良いのか。少し言い方をかえると、大友氏みたいに文化とか様々な意味での交流、或いは国際性というものに非常に豊かな性格を持っている、そういうことを戦国大名を評価する時にプラスに評価する必要がないのかどうか。さらに言うと、典型的だといわれる戦国期城下町に対し、そうでないという事を一体どのように評価するのか。そもそも典型的と言われているものが本当かどうか、疑問だと思っています。

今日は、最後のほうで越前朝倉氏の一乗谷の城下町の話を予定しています。俗にこれは典型的な戦国期城下町と言われていますが、私はむしろある意味で大友氏の豊後府内に近いのではないかという話をしようと思っています。具体的には京都と豊後府内との比較をしていきたいと思っています。その中で、今申し上げたような点に少しでも答えられればと思うのですけれども。ただ一方で、私が多分豊後府内や大友氏について色々と誤解しているのと同時に、今回の展示を見せていただきまして、京都に対する誤解もあるのではないかと思っていますので、そうした点についても少しご注意させていただければと思っています。

【Ⅰ　都市の成立と展開】

それでは、まず「都市の成立と展開」という事についてお話したいと思います。簡単な年表（17ページに掲載）をつけておきましたので、これは京都の方の歴史の動きと大友氏とか豊後府内の動きがどういう風な平行関係にあるのかということで、適宜ご参照いただければと思い載せました。

（１）京都の場合

それでは、実際に京都の方の話に入っていきたいと思います。恐らく九州の皆様は余りご存知無いかもしれないと思って基本的な事柄から今日はお話させていただきます。

京都はご存知のとおり平安京という都がありましたけれども、その内の「左京」という東半分の部分だけが平安時代後半以降生き延びまして、「右京」の方は平安時代半ばには興廃し田地に帰ってしまいます。前の方にスライドで地図を提示いたしました。一番左端、西の端になりますが、ここに千本通りが通っています。この部分が旧平安京のど真ん中を通っている朱雀大路になります。その左側の「右京」の方は完全に田んぼに変わってしまい、「左京」の方に中世おいては町が広がっている様子が分かります。それから平安京は勿論一条通りよりも南側だけですので、一条通りより北側に新しく開発された町並みがあることもご理解いただけるかと思います。

この室町時代の応仁・文明の乱より前は、今ご紹介しましたように、旧「左京」域の全域に町並みが広がっていたと考えられています。この図で点を落としているのが、左下に凡例があるように酒屋や土倉という金持ちがどこに住んでいたとか、それから祇園祭りの山鉾がどこの町で出されていたかということを地図に落としています。そういった地図ですので、旧「左京」域のほぼ全域に室町時代は町並みが展開していることが分かるかと思います。

一方、武家についてはどうなのかということですが、この地図は足利尊氏の時代の武家屋敷の展開を示しています。尊氏の段階は、屋敷が「下京」の後ろ、一番北の端の所にありまして、「上京」から「下京」のほぼ全域に家臣団の屋敷が展開しているということが分かっています。ですから、先程示しました商人や職人の分布と余り変わらない状況でした。

ところが、武家の方は次第に住む場所が限定されていきます。15世紀半ばぐらい、応仁・文明の乱の少し前になりますが、この頃、室町殿＝花の御所というのは何度も使っては廃れていきます。この段階は室町殿が中心でして、これに近い所に武士の館が徐々に集り始めています。尊氏の段階は武家の邸宅が分散しているのに対して、この段階は室町殿のもとに集り始めている様子が分かるかと思います。「上京」の方の内裏、ここに天皇がおられまして、その周りに貴族の邸宅があります。そして将軍邸と武家の邸宅が「上京」に集中し、「下京」の方は商人とか職人の町となっていく。そういう大きな変化は、既に応仁・文明の乱の前にある程度進んでいたことが分かります。

それが応仁・文明の乱で一旦全て焼けてしまいます。これが応仁の乱後の復元図です。この時代の大きな特徴は、「上京」という部分と「下京」という部分の大きく二つの島のような都市域があって、その間を唯一、室町通り沿いの町並みが結んでいるという様子が復元的に研究されています。それから、「下京」の方が分かりやすいかと思いますが、その周りを惣構という土塁と堀があったことが発掘調査で分かっていますけれども、これが「下京」の全域を囲っていました。都市を囲う都市城壁といってもよいかと思いますが、これが「上京」の方も北側・西側・南側でほぼ確認され、東側には相国寺という大きな寺がありますが、これも一つの惣構を構成しているとすれば、「上京」もほぼ全域を惣構で囲まれているということになります。

しかし、応仁・文明の乱の前に比べると、非常に狭い空間の中に「上京」の場合ですと、内裏はあるし、将軍邸はあるし、武家の邸・公家の邸はあるし、そしてもちろん沢山の町人が住んでいる。「下京」の方も限定された空間の中に、金持ちである酒屋・土倉とか、山鉾を出す山鉾町が満ち満ちているという、そういった空間に15世紀後半大きく変わったと考えられています。

そうした様子をとてもよく表しているのが洛中洛外図屏風です。展示にもありますが、それとは違いまして、上杉本という一番有名な絢爛豪華だと言われているものを前のスライドの方に出しました。これが「公方殿」＝将軍邸に当たります。それからこの場所に「細川殿」＝

管領邸があります。周りに沢山の武家の邸宅、そしてお寺、さらには町屋が立ち並でいる様子が見て取れるかと思います。

こちらは「下京」の方になります。この辺りに祇園御霊会の山鉾が町中を巡行している様子が描かれていることが分かるかと思います。或いは、室町とか烏丸といった南北の道路沿いに有力な町人が住んでいると思われる町並みが展開している様子が分かります。それから一番左の外れに内裏があります。内裏は実際には「上京」の中にあるのですけれども、先程紹介しました「上京」隻の幕府と対峙する意味で、「下京」隻の方の端っこに内裏＝天皇の政治空間が表現されています。本当は、この内裏と「下京」の間はかなり長い空間があるのですけれども、この洛中洛外図屏風ではデフォルメされてすぐ近くにあるように描かれています。

「上京」隻ですと、将軍邸、それから細川管領邸、幕臣の邸宅や細川の家臣たちの邸宅、寺院や町屋が沢山あります。「下京」の方は、そうした武家や公家関係のものが戦国時代に全く無くなっていますので町屋がひたすら広がる。その中を祇園御霊会の山鉾が巡行するという絵柄で描かれています。

これは上杉本だけではなく、多くの洛中洛外図屏風に共通する図柄になっています。勿論、多少細かい点は違います。例えば、展示されています東博模本というのは特段変わっていまして、将軍邸が「下京」隻の一番端に載っています。何故か、「上京」隻の方は細川管領邸だけが大きく真ん中にあり、「下京」隻の方に花の御所も、それから内裏＝天皇の居所もあるという変わった構成の洛中洛外図です。

先程紹介しましたような戦国時代の復元図は、高橋康夫さんが洛中洛外図屏風などをもとに復元して描かれた「上京」・「下京」の図ということになっています。

この戦国時代の京都の特色は、朝廷、それから幕府、寺院が「上京」を中心に展開しているというだけではなくて、「上京」もそうなのですが、特に「下京」を中心として都市の共同体が非常に発達しているという点も大きな特徴であるといえるかと思います。

京都の都市共同体は三重の構造になっていると考えられています。一番大きな括りが「上京中」・「下京中」という「上京」全体・「下京」全体で、これを惣町といいます。次のレベルにあるのが町組（ちょうぐみ）と言われるものです。例えば、「上京」には一番東端を立売組、それから小川組、一条組などがあります。「下京」も同じように丑寅組とか、中組・西組・巽組といった町組があります。この町組のさらに下のランクに町（ちょう）と呼ばれる組織があります。この町というのは個別町とも言いますが、私たちが比較的イメージしやすい、今でいう町内会ということになります。一本の道路を挟んだ両側の町で、大体数十軒である場合が多いと思いますが、それが一つの町と呼ばれる集団を作っています。つまり、生活共同体ということになります。生活共同体ですので、日常的に町内の人たちと連帯してお互いに保証しあっていくという組織です。ただし、決して今の町内会のように民主的な組織ではありません。町の人みんなのために活動していれば良いのですが、もしそこから外れるような、少しでもみんなの機嫌を損ねるようなことをした場合には忽ち排除される。よく村八分といいますが、それと同じように町八分にさらされてしまうような組織でした。ですから、一人一人の独立した個人によって成り立っているような組織ではなくて、むしろ町というものが、ある場合は各個人の自由を制限するような組織でさえありました。

こうした町というものがまずあって、それが小さいところで３つ、大きいところで十幾つが集って町組を作り、さらに町組が「上京」の場合は５つ、「下京」の場合も５つ集って「上京中」・「下京中」とよばれる惣町をつくります。このように下から積み上げ型の都市共同体いうものができています。

そして先程紹介しました惣構は、この都市共同体が実際にお金を出して人夫さんを使って造らせています。或いは「上京」の場合ですが、信長が攻めて来るという事件が起きます。足利義昭が二条城において籠城し、それに対して上京が義昭と一緒に反信長の姿勢を示します。そのため信長に攻められるわけですが、その時、女性や子どもたちは洛外の村に避難させるのですけれども、成人の男性が残って武器を持ってこの惣構の所に結集して信長に対抗しようとしたという記録も残っています。ですので、よくヨーロッパの自治的な都市がもつような城壁を使って、都市の民衆が自分たちの都市を守ろうという動きが、京都の場合、一瞬だけですけども確認できます。

そうした中の一つの立売組について、後の話と関わりますので、その成立をご紹介したいと思います。この立売組というのは、明確に確認できるのは1570年代ですけれども、既に1540年代にこの立売組の核になる部分がまとまっていることが史料から分かります。それが立売四町といいます。これを町名で申しますと、上立売町・西大路町・裏築地町・室町頭南町の四町で、後に立売組

が出来上がる際の一番核となった町だと言われています。

洛中洛外図屏風でみていくと、花の御所の北側のこの部分が上立売町、ここが西大路町、そしてここが室町頭南半町、こちらが裏築地町になります。洛中洛外図屏風に全ての町並みが描かれているわけではないのですけれども、この立売通りと室町通りの交差点の四方の町が立売四町ということになります。これが中核となったということです。町組というのが、こういう中世の古い由緒をもつ町を基礎に展開しているということです。

（２）豊後府内の場合

さて、次に豊後府内の話に移りたいと思います。俄か勉強になりますが、豊後府内の町の成り立ちについてご紹介していきたいと思います。

豊後府内は大分川の自然堤防上に出来た町で、近世の大分の城下町に対して、その東南方向に展開しています。既に鎌倉時代から府内の「河原市」というものがあったという事が言われていまして、大分川に一番近い河原、実際には川の堤の上の微高地になるかと思いますが、この辺りから町が発生したのではないかというのが、鹿毛さんのお考えです。それから、万寿寺というお寺は1306年に再興されたと言われていまして、古くからこの地にあって、仮に「一の大路」と言われている道路の南端に位置しますので、たぶん河原市と万寿寺が何らかの関わりを持って南北朝・室町時代を通じてあったのではないか。このように大分川沿いの微高地上にお寺とか、市とか、門前町的なものが、それはさらに南へと繋がるかもしれませんけれども、発展していることが言われています。

戦国時代になると、先程の「一の大路」を形成するような、上市町・工座町・清忠寺町・下市町の町々がつづいていると考えられています。それから、色々な史料から万寿寺の境内にも町屋が立ち並んでいることや、南の方の寺小路町にも町屋が展開していたのではないかということも言われています。この東よりの「一の大路」とは別に、戦国時代に「四の大路」と仮に言われています一番西側の道路があります。この道路は、どうも台地の上にある上原館と繋がっていくようで、この道沿いに上町・中町・下町の三つの町が展開すると言われています。

それでは、府内町の中の大友館として知られる部分がどうなっていたかということですが、どうもまだ良く分からないということのようです。最近の発掘成果によると、古くは、もう少し規模の小さい方形の館、すなわち武家館みたいなものが幾つかあったのではないかと言われているみたいです。仮に「二の大路」と言われている大友館のすぐ東側の道路は、まだ古い段階にはなかったようです。古い段階は、東の「一の大路」と西の「四の大路」だけで、この間は武家の館らしきものが幾つかありましたが、まだ東側と西側を明確に結ぶような状況は認めにくいのでないかと思います。ただ、一番北の端の部分になりますが、古川町・辻之町のある道も古いのではないかと言われています。ですから、想像をたくましくすれば、この東西方向に走る道で結ばれた「四の大路」と「一の大路」という主要な道が通っており、その空間地に武家の館が少しずつ展開し始めているのかなと思います。

こういう状況が少しずつ分かりつつあるようですが、天正初年、元年が1573年ですけれども、その頃以降、この大友館を中心に大規模な都市再開発が行われたと言われています。この1573年という年は、先程の年表を見ていただきますと、大友宗麟が家督を義統に譲っています。一時、宗麟によって臼杵に政庁が移されていますが、その義統が府内を再度大友家の首都に認定して、かなり大規模の都市再開発を行った時期と言われているようです。例えば、考古学の方で、発掘で有名になりました立派な庭園がこの時期に拡大・整備されているとか、大友館も一般に方二町と考えられていますが、この方二町に拡大した大友館が建設されるとか言われています。それから文献資料の方ですが、「土囲廻屏」がこの時期にどうも築かれている。この「土囲廻屏」は、恐らく大友館の周りを画するような塀で、この塀を造るので国内の各地から動員して手伝いをさせているという史料が残っています。さらに今年の主な発掘の成果として、大友館の東側の「二の大路」がこの時期に通されたことが分かってきているようです。このことと、大友館の近辺に御所小路町・御北町・御西町・御内町という町名がありますが、特に御所小路町・御内町というのは当然大友館を念頭においた町名かと思うのですけれども、こういう所の開発も行われたのでは、という事も言われています。

そうした中で、しばしば使われている史料（17ページに掲載）ということで、それをレジュメに載せています。この史料については鹿毛さんが一つの理解を示されていますが、私は少し読み方を変えたらどうかということで、今日話させてもらいたいと思います。

この「府内屋敷　祇園御神領分之儀」とありますが、この文書の宛先の税所越中守という人物は、祇園社を統括している神主だそうです。その税所に対して、府内の

中にある屋敷、つまり町屋の中で祇園の御神領になっている分については「其方格護可有」、つまり貴方の方で支配しなさい。「然者」、さらにという事でしょうか。「東之築地至外通者、町人召移、以屋敷料、右社頭上葺等可有馳走之由、尤肝要候」。東の築地外通に至りては、町人を召し移して、恐らく町人が余り住んでいないのではないかと私は思うのですが、人の住んでいない空間なので町人を召し寄せて、ここから屋敷料を取る。つまり、借家するのか借地なのか分かりませんが、そこから税を取り立てて、それで祇園社の上葺を葺いたりするようにしなさい。それは、とても大事だ。「仍諸点役之儀、令免許候」。その代わり、大友から賦課する点役と呼ばれるような税は免除する。新しく町立てをするわけですから、あんまり過重な税を課してしまうと人も寄り付かないだろし、落ちぶれてしまうといけないので、大友から賦課する税は免除するので、屋敷料で祇園社の上葺を綺麗にしなさい。そういうふうな命令だと思います。

鹿毛さんの理解は、私が間違っていなければ、“東の築地外通に至りては”とある「東之築地」というのが大友館の東側の築地という理解をされています。私もその理解を採っていますが、“外通に至りては”の「外通」は、先程から申し上げています「一の大路」を鹿毛さんは考えておられるみたいで、ここに新しく町人を召し寄せて再開発しようとしているのだ、と言われています。

私はそうでなくて、「東之築地（より）」ぐらいを補ってみたらどうかと思います。つまり、大友館の東の築地から外通、すなわち東の築地と「一の大路」の間というように読んで、その間に町人を召し寄せて屋敷料については祇園社に寄付する。もし、このように読めるとしたら、先程少し言いかけた、この辺の開発がこの時期に進んでいくのではないかという話と、非常に整合的に理解できるかもしれない、というふうに素人ながら考えました。

それから、「二の大路」が天正元年以降できるとして、何本か東西に走る通りがありますが、こういった通りがこの時期に出来たのかどうか。もう一つ大事な点かと思います。というのは、絵図をみて明らかなように府内は碁盤目状の町になっています。この辺が京都に近い町並みだといわれる根拠でありますので、もともと東端の南北の通り・西端の南北の通りがあって、北側に東西の通りがあるにしても、その間が空間地だとすると、たとえ南北の道路（「二の大路」）を新たに通してもまだ碁盤目にはなりません。何本かの東西道路が通らないと碁盤目状なりませんので、これも果たしてこの時期なのかどうか、大事な点だと思います。

それから、少し時代は下がりますが、豊後府内にも「町々のおとな」と言われる人たちがいた事が、鹿毛さんの丹念な史料調査によって分かってきています。こういう町共同体という面でも京都に近いような町並みが出来たのかもしれない。それは、最近の研究では天正初年、1573年以降に本格的に展開したらしいということが分かってきています。

【Ⅱ 町のなりたち】

次に町の成り立ちということで話をしたいと思います。このように町全体のかたちに注目するだけでなくて、ここではもう少し細かいところまで注目して、京都と豊後府内の似ているところ、似てないところをお話できればと考えています。

（1）将軍邸・大友館とその周辺

京都の方では豊後府内ほど正確な復元図が実は描けません。結局、洛中洛外図屏風しかありませんので、それをたよりにするしかありません。町組の範囲はある史料で分かるのですけれども、武家屋敷が正確にどこにあったかというのは実際のところよく分かりません。将軍邸の一番近い武家の屋敷というと、「公方様」の西側に「入江殿」の屋敷があります。入江というのは、大阪の高槻の国衆でして、細川氏の家臣で幕臣ではありません。それから反対側に小さな屋根がみえます。これが「いせのかみ」＝伊勢殿といって、これは幕臣です。どちらかと言えば、軍事部門より文官のトップとして仕えています。この幕臣のお屋敷は、烏丸通りを挟んだすぐ東側、今の同志社大学の構内の辺りにありました。これぐらいが武家の屋敷で、あとは公家の邸宅、例えば近衛殿・徳大寺殿とかが近くにありますが、幕臣の姿は余り見えません。唯一、「はたけ山のつし上ら」というのがあります。これは、もともと畠山殿という有力な幕臣の屋敷がこの地にあって、それが潰れた後に再開発されて、この上杉本の洛中洛外図屏風では女郎屋、すなわち歓楽街になっています。展示されている「洛中洛外図帖」には畠山殿の屋敷の場面が描かれていますが、上杉本のときにはここに畠山殿の屋敷はありませんでした。北へ行くと、管領の細川氏や三好氏などの細川氏の家臣の屋敷が描かれていますが、はっきり言って、将軍邸は伊勢守が側にいるぐらいで、周りには相国寺という大きなお寺や公家邸が幾つかあって、それ以外は町が取り巻いている状況が分かるかと思います。

しかし、将軍邸の周りの町は普通の町かというと、そうではありません。立売四町はやがて成立する立売組の町組の中核となる町です。そしてこの部分に“札の辻”という十字路があります。「上京」に一ヶ所、「下京」に一ヶ所、“札の辻”というのがありますが、江戸時代風にいうと高札場になります。つまり、幕府からの法令をそこに立てて京都の市民に知らしめる、そうした高札場にあたる“札の辻”があったと言われています。さらに言うと、立売四町の中の北側の室町頭南半町は、全「上京」の中心の町としてやがて姿を現わしていきます。上京文書という膨大な文書群があるのですが、それは、この室町頭南半町が江戸時代にわたってずっと保存してきた文書群です。ですから、この将軍邸のすぐ脇の立売四町がただの町ではなくて、「上京」全体の中心の町でもあるという点、これは注目すべきではないかと思います。これだけ多くの町がある中で、例えば小川は結構有力な町ですけれども、これを押しのけて将軍邸のすぐ横に上京の中心の町がある。こういう点はすごく大事な点ではないかと思っています。自治の一番盛んな、有力な商人が住んでいる空間ですけれども、そういった空間が権力の屋敷のすぐ横にあるということ。単純に権力と自治は対立関係とか、別々のものというのではなくて、密接な関係をもって存在するという点に注意をできたらと思っています。

さて、それで次に豊後府内の話になります。豊後府内のどこが武家の居住空間かということで幾つか色々な方が説を出しておられます。

まず、こちらの木村館長の説ですけれども、中世の豊後府内で知られている町名で、その大半が近世の城下町に継承されているなかで継承されない部分があるのは何故か。そこに大友の家臣団が居住していたからだろうと、そういう想定をなされています。全部がそうであるとは思いませんが、かなり妥当性の高い、面白い話だと思います。特に、仮に「四の大路」と言われている辺りにそうした町が集中しているのが注目されます。

この「四の大路」周辺のことで申しますと、五野井隆史さんが、豊後府内の教会領域ということで、ダイウス堂を中心とする辺りの復元研究をされている論文があります。この論文の中で、ダイウス堂に対して、つまりキリシタンに対して悪戯をする人が多いので、当主の大友宗麟が付近の家臣に命じて、そうした悪戯行為がないようにしろ、という命令を出している史料をあげられています。とすると、ダイウス堂近辺に大友の家臣が住んでいたのかな、という推定ができます。

問題なのは、館の東側です。先程申しましたように御内町・御北町・御西町、この辺は明らかに大友館に伴うような町名を持っていますので、そういう所に住んでいる人や、或いは大友館の正門だと思われる東側の門のすぐ北側の桜町に住んでいる人は、何か大友氏と関係があるのではと考えられます。そこに住んでいるのが武士なのか町人なのか。兵と商工が分離する前ですからそのような区別をするのも意味が無いのかもしれません。被官の有力商人とか職人である可能性もあるかと思います。特に桜町の一番北側にどうも計屋でないかと思われる大きな屋敷が発掘で出ていまして、ここなんかは大友氏の家臣であり、かつ職人というか、商人であった人たちの屋敷であったのでは、という説もあります。

先程申しましたように京都の場合は、将軍邸のまん前の立売四町が近世においても「上京」の中心の町でした。豊後府内の場合、中世の町が近世の城下に移っていますが、多分近世の城下町でも序列があると思うのですけれども、その近世の城下町の序列でナンバー1とか、ナンバー2とか、ナンバー3とかいう町がもう一度中世まで戻すと果たしてどの辺に位置するのか。もしそういうことが分かれば、町に住んでいる人の性格とか、町の性格というものと大友館との関係がみえてくるかも知れないとも思っています。

（2）木戸と構（かまえ）

次に、木戸と構についてみてみたいと思います。

構というのは、余り聞きなれない表現かもしれませんが、防衛施設というようなものです。木戸門の場合もあれば、柵とか、それから土塁とか、色々なものを構といいます。ちなみに、京都の場合は、木戸といった言葉でなくて、古い時代は釘貫（くぎぬき）とか針貫（はりぬき）ともいいます。釘貫とは、今の大工道具の釘ぬきとは違いまして、釘を抜くのではなく、釘を貫通させる方になります。つまり、木の板とかに後ろから釘を貫通させておいて、敵が迫って来ても痛くて触れない。今の鉄条網の代わりに、外向きに釘を貫通させてある板材などを使って造ってある施設だから、釘貫と言うようですけれども。そういう木戸のことを釘貫といいます。そういう釘貫は、京都の場合は15世紀に早くも確認されます。応仁の乱より前に既に「上京」の内裏周辺に幾つか出て来ます。それから、例えば京都の南側にある東寺という所で釘貫があったことが分かります。さらに応仁・文明の乱に際して、激しい市街戦が戦わされるわけですから、京都の各所に乱立したという事が色々な史料から分かっています。戦国時代になると、「ちやうのかこい」というものが出てまいります。レジュメの方に1、2点史料を

上げておきましたが、1527年の史料ですと、「世上余物忽之間、此方つし（辻子）の口にかこいをさせ候」とあります。これは、「上京」の六条通りに住んでいる山科言継という中級のお公家さんが書いた日記です。山科さんは自分の周りに一般の民衆が住んでいるような町に住んでいるわけですけれども、どうも敵が攻めてきそうだということで、「つし」と呼ばれる通りの入口に囲いをした。山科さんは、京都の東側の山科に所領を持っていまして、竹を沢山自分の所領から納入されてくるものですから、その竹を使って町の口に囲いをした。まさに、町の囲い、或いは構といえるものだと思います。

それから、次の1542年の史料、これはちょっと複雑ですけれども、誓願寺の境内の北町に住む町人が針貫を造り、これはけしからんと言って誓願寺が幕府に訴えて、それに対する幕府の判決文になります。「彼針貫者」、つまり町人が造った針貫は、誓願寺の境内の川の上、これは誓願寺の前に小川という川が流れていますが、この川の上とか、それから「南北之築地通」の針貫はかまわないが、それ以外のものは早く壊してしまうように指示したものです。つまり、誓願寺が造っている正式な針貫は良いけれども、町人が造った私的な針貫は壊せと、そういう命令を幕府が出しているという史料です。大体、自治とか自衛のシンボルとして町の囲い・町の構というものが、これまで京都の戦国時代の研究でしばしば取り上げられてきました。

洛中洛外図屏風をみていただきますと、様々な木戸や構に当たるものが描かれています。上杉本には何故か一つも描かれていないのですけれども。これは今展示されています東博模本の中に描かれている町の囲いというか、木戸門です。これは大変面白いです。よくみていただくと分かりますが、開け閉めしやすいように門の下に“わっか”が付いています。こういう木戸門なんかも描かれています。もう一つ面白い事例ですけれど、上杉本の「下京」の方に川の両側に道があり、そこに木戸門が描かれています。川の上にわざわざ塀を延ばして通れなくし、道の上だけ木戸門を設けてここだけを通れるようにしています。

豊後府内の方にもこういう木戸門があるというので、洛中洛外図屏風でどういう所に木戸門があるのか、何かパターンはないのか捜そうと思ってみました。余り大した結論はでておりませんが、一つは「上京」に比べると「下京」の方が少ないことが指摘できます。祇園祭りに表現されるように、一般に「下京」の方が都市自治とか共同体が強かったと言われますけれども、何故か「下京」に少なく「上京」に多い。この理由は何なのかと思って検討してみました。本当はもっと詳細に検討すべきとは思いますが、「上京」の方にある木戸門の場所は、内裏とか武家の邸宅の近辺、それから寺社の門前にどうも多いような気がします。こういう風に考えると、木戸門を造るのは、必ずしも町人が町の自治のために造るだけではなくて、武家とか公家とか寺家が自ら邸宅や寺院を防衛するために造っているのもある。だから、「下京」より「上京」の方が多いのでは。これが一つのとりあえずの結論になります。「下京」に木戸門が少ないのは、恐らく「下京」の方が惣構がしっかりしているからだと考えられます。つまり、一番外側のラインである惣構がしっかりしているので、ここでブロックして中に入れさせない。逆にいうと、中の住人同士の連帯感が強いので木戸門や構を造ってお互いに見張りあう必要が無いのかなとも考えています。余りよく分かりませんが、これは自分自身のこれからの課題かと思っています。

豊後府内の方ですが、古図によると、かなり沢山木戸門が描かれている様子が分かるかと思います。ただ、よくみていただきますと、必ずしも全部の交差点ごとにあるわけでもありません。また、何か特定の道路にだけあるわけでもありません。どちらかというと、大友館の周りは少なく、むしろ周辺部の町通りの方が多いような気もしないではない。そのあたり何とかうまく、こういう原則ですと言うことができれば良いのですが、結局、結論はでませんでした。

実際に発掘で木戸門の遺構が出ている例がありまして、大友館の東側の「二の大路」の名ヶ小路の境で恐らく木戸門と思われる遺構が確認されています。どの絵図にも描かれている木戸門がそのまま発掘で出てきたということで面白いと思います。

府内古図にはA類、B類、C類の三種類ありまして、いずれも木戸門が描かれ、また場所が違います。一般的にA類は一番信憑性が高く、古い時代を再現していると言われていますので、このA類で復元・研究する必要があるかと思いますけれども、B類、C類で木戸門の場所がどういうように違うのか比較検討してみると面白いかと思います。木戸門があるという事の意味合いが、もう少し京都の事例から豊後府内に敷衍して解ければと思って少し作業してみましたが、結論的に言うと中々うまくいきませんでした。皆さんの方でも考えていただければと思います。

（3）祇園会と風流

次に都市の祭礼ということで、祇園会と風流（ふりゅう）というものを取り上げてみたいと思います。

まずは、京都の祇園御霊会ですが、上杉本の洛中洛外図屏風の「下京」に描かれている一例を取り上げました。船鉾とか、長刀鉾・月鉾とかが四条通りを練り歩いている様子が描かれています。こういう山鉾というのを、それぞれの町が出します。例えば船鉾ですが、船鉾町でこの船鉾を出すための町共同体といいますか、町の人たちがみんなでお金を出し合って仕立て上げるという構造となっています。ですので、祇園御霊会の山とか鉾というのは町が単位で出されていると思われがちであったのですけれども、しかし実はこれは戦国時代の後半以降のことだということを河内将芳さんという人が最近論文でお書きになりました。つまり、もう少し前、室町時代ぐらいでしたら、どういう風にこの祇園御霊会がなされていたか言うと、祇園社とか、その上にいる山門＝比叡山延暦寺が京都の町内のお金持ち、酒屋さんとか土倉・金貸しなどを個人的に指名して金を出させます。これを馬上役と言いますけれども、このようにお金持ちから金を取るかたちで祇園御霊会の資金を調達する。或いは、山とか鉾を出すのも町共同体だけではなくて、例えば綿本座とか綿新座という綿を生産する職人・商人のグループ。それから堀川神人。堀川は材木商が並んでいるところです。それから柑類座。よくは分かりませんが、柑橘類をあつかっている商人でしょうか。さらに京都の中だけではなくて、摂津の今宮神人。山崎の定（シツメ）鉾。山崎とは大山崎ともいいまして京都の南西の方向にある交通の要衝で中世の都市だったところで、そこからも鉾を出しています。大舎人の鵲鉾。大舎人町とは「上京」の西の方、西陣と呼ばれている地域になります。こういう所からも応仁・文明の乱より前とか、15世紀末〜16世紀前半ぐらいまでは山とか鉾とかが出ていました。それが、16世紀後半以降整理されてイメージされるような「下京」の町だけが出すような形になっていった点をここで指摘しておきたいと思います。

それからもう一つ風流踊り、これは七月のお盆の時期に人々が熱狂的に舞い踊るお祭りですけれども、これも河内さんがとても面白い研究をされています。この風流というのは、「上京」とか「下京」の町共同体が単位として出します。町人たちが色々と仮装してパレードをするわけです。ただし、誰でもが踊りに参加できるのかというと、どうもそうではなくて、特定の限られた地域とか、限られた住人だけしか、この風流を催すことが出来なかったという事です。京都は何百という町があるのですけれども、このうちの十数個しか出てきません。それは参加できない圧倒的多数の町とか町人に見せつけるためのイベントではないか、というふうに河内さんは考えられています。さらに、この風流というのは町人の風流だけではなくて、武家とか公家の風流も同時並行で行われる。一日目は町人がやるとか、次の日は武家がやるとか、その次は公家衆がやるとか、そういうお祭りです。これは少し飛躍のある議論かもしれませんが、都市を支配する権力と支配される側の民衆のあるべき交流の姿を見せる舞台であったのはないかとも河内さんはおしゃっています。

それでは、豊後府内ですけれども、鹿毛さんのご論文や木村さんのご論文の中に引用されている史料だけしかみていないのですけれども、祇園会とか風流があったらしい。これは少し後の時代の回顧談とされていますので、同時代の史料ではないのですけれども、一応、祇園会や風流踊りの記事があります。まず、祇園会の方は「山ハ四町ヨリ四本、万寿寺大工ノ山一本、山崎一本、惣大工一本、右七本ハ相定候。中比より惣大工へ宥免候也。立願候へは、いか程も山をわたし候」云々とあります。つまり、祇園会の山ですが、四町から各１本ずつ、合計４本出すということ。それだけではなくて、万寿寺大工の山、これは万寿寺に仕える大工さんたちが山を出している。次の山崎についてはよく分からないようですが。惣大工、これは万寿寺の大工ではない惣大工、つまり、これは都市の大工なのでしょうか。多分、万寿寺に組織されている大工集団と、それから都市の大工集団があるのでないかと思うのですが、その惣大工がさらに１本出している。「中比より惣大工へ宥免候也」とは、以前は惣大工は出していなかったのが、ある段階から惣大工が出している。

これは戦国期の事かと思うのですけれども、こういうかたちが豊後府内の祇園会の形としてあるとすると、京都では16世紀初めに廃れてしまったような古い形の祇園会の山鉾を出す方法が、この豊後府内でなされていたことが分かるかと思います。

ちなみに、ここまで形式が詳しくは分かりませんが、大内氏の本拠地である周防国の山口も結構祇園祭りが盛んで、これも都市改造の中で新しく祇園社を大内氏が設定して、祇園祭りを興隆していくということが分かっています。

こうした祇園会も「都へのあこがれ？」というか、そういう中で行われるということが言えるのかなと思いました。

それから次の風流ですが、７月の12日、26日、今でい

うとお盆の前後ですけども、大風流を豊後府内でやった。これも「先祖の吊之儀」、先祖供養だと。その次はなかなか難しいですけれども、「中衆の風流と申候ハ、屋形風流にて候。市衆、町衆と申候て、殿中衆二ツ仕候。又本庄、寒田、代々一ツ々仕候」。屋形風流とありますので、この辺は多分大友の家中がやっている風流ではないかと思います。「市衆、町衆と申候て」とあるのは多分、市衆・町衆の仮装（格好）をしてやるという事でないかと私は思いました。それとは別に「地下人五ツ仕候。惣而、四町にて候へ共、風流計古河の者各別に仕候」。こういう都市の祭礼は、普通は4町でするのだけれども、この風流だけは、古河、一番北の端の町ですけれども、何か由緒があって古河の者も出すと書かれています。

「町衆」「市衆」という表現がありますが、先程の私の評価のように大友氏の家臣が変身してやるのだとすると、彼らは多分大友館の近辺に住んでいるのでないかと思います。京都の場合もよく分かりませんが、将軍の家臣とか、大名の家臣がやっているわけですので、わざわざ外からやってきてこの風流に参加しないと思います。一定の人たちが、この豊後府内の町中に住んでいると考えざるを得ないかなと思います。そして彼らが「町衆」「市衆」に仮装してやるのかなと思いました。

それから、この祇園会の史料と風流の史料を通じて出てくる「四町」、これが一体どこかというのがとても注目される点です。実はこれにつきましては、木村さんの説と鹿毛さんの説が違いまして、中々裁定を下すことは出来ませんが、私自身は鹿毛さんの説の方が良いのでないかということで、この後説明させてもらいたいと思います。

木村さんの説は、近世の府内城下町の町組があって、これを一応、ここで言っている「四町」の内の3つとされています。もう一つ足りませんが、この3つが町組単位として祇園の山とか、風流を出すのだという理解です。それに対して鹿毛さんの方は、「一の大路」沿いの4町がここでいう「四町」だという理解です。

単なる京都との類似なのですけれども、祇園会の山とかを出す単位に惣町というのは少し大きすぎるかと思います。京都と同じように町単位に出しているという理解でいいのではないかと思います。風流の方も、京都の場合中々難しくて、惣町単位で出しているようにみえる史料も河内さんが紹介されていますが、基本は町単位で出しているようです。京都との類似の関係でいうと、風流とか祇園会の山を出している「四町」というのは、「一の大路」沿いの4町と考えてはどうかと私は思っています。そういうふうに考えることができるなら、先程の話を繰り返すことになりますが、「一の大路」沿いは万寿寺があることからもうかがえるように一番古い町並みではないか、町としても一番古い段階から成長してきている最も由緒のある所だと思われます。さらに風流というのが、他の町とか町人に見せるような意味があるという京都についての河内さんの表現を借りると、この由緒正しい町が他の新しい町と町人に見せつけるような行事としての風流が大友館の周辺の家臣たちとある意味交流しながら行う、まさに京都のパターンと同じような風流が行われていたのかもしれないと思った次第です。かなり推測を含んでいますので、まだまだ検討の余地があるかと思います。

【Ⅲ　戦国大名城下町の新基準】

さて、最後の「戦国大名城下町の新基準」についての話に入りたいと思います。ここから余り論理的でない、わりと自分の想いをお話することになるかと思います。

従来の戦国大名城下町のイメージについては、最初に多少強調しすぎるようなかたちで強調しました。強力な大名権力が家臣団や都市民を強く統制している、そういう城下町です。

そういう城下町につきましては、旧来の説では主従制というものがとても大事で、主従制が段々強くなっていく、それが元々ばらばらの城下町から大名の屋敷を中心とする一元的な城下町に移っていく、そういうような理解です。求心性が強い、つまり戦争に強い大名だけをある意味高く評価するような理解でした。しかし、ここで描かれている戦国大名のイメージというのは、俗にいう武田信玄とか、上杉謙信とか、北条早雲とか、そして最後の織田信長とか、東国中心の戦国大名のイメージかと思います。

しかし少し視点を変えて、例えば近畿地方とか、それより西側の戦国大名をみてみると、中々こういう基準に当てはまる大名というのは少ないというか、いません。では、そういうところの大名とか大名城下町は大したことはなかったのか。いや、そうではないだろうという事をお話します。

まず城下町は、その中心に家臣団がいるはずで、家臣団が城下町に集住しているのが城下町の一つのパターンです。この豊後府内の場合、中々難しく、どこに家臣団が居るのかよく分からないのですけれども。ただ従来一般的に、どうして家臣団が城下町に集住するのかというと、主従制が強ければ強いほど城下に集住するというように何となく強制的に集められるのだ、と考えられてきました。これは、例えば織田信長が安土の城下町に岐阜とか清洲にいた中下級の家臣を強制的に移住させたという史料が『信長公記』にありますので、そこからのイメージ、類推なのですけれども。しかし、河内の畠山という大名とか、或いは周防の大内氏、さらには越前の朝倉氏、近江の六角氏という大名の方がよほど早く城下町に家臣団の集住をしているらしいという事は色んな文献資料とか、或いは発掘などによって分かりつつあると思います。

彼らの家臣団が主従制による強制にあったのか、それが全く無かったとはいいませんが、むしろ彼が城下町に集住するのは、これは官僚として、つまり大名中心の行政とか、司法に参加するためにあったと思われます。中世的な官僚制を発達させた大名ほど、家臣団の城下町集住が早いというのがむしろ事実に近いのではと思います。

大友氏の場合はどうかと申しますと、鹿毛さんの研究の孫引きになりますが、例えば十六代政親の段階で「ほうはうの人しゆ」、つまり方々の人数、すなわち家臣たちを「府内にはせあつめ候」という記事がありますし、永正12年（1515）には近臣である「年寄衆」は常時府内に在勤せよ、という指示が出ております。確か1570年代の事だったと思いますが、信長の家臣が安土に集らなくて、岐阜とか清洲に居て叱り付けられたという記事があります。レベルは違うかもしれませんが、それより60年前に大友は近臣層の集住を成し遂げているという事です。これを主従制だけで説くことは勿論できないだろうと思います。

それから二点目、武家の邸宅と町屋の「距離」ということなのですけれども、もうわざわざ説明するまでもないかもしれませんが、これは洛中洛外図の上杉本の室町将軍邸とその周辺です。先程申しましたように、武家の邸宅は余り無くて、むしろ門前のような空間に町屋が立ち並んでいる。そういう町人の世界の一番中心の立売の辻が、まさに花の御所の北西隅に一致するという距離感。或いは公家の邸宅とか、寺院とか、武家の邸宅がモザイク状に周りに広がっている状況として「上京」のことについて申し上げました。「上京」の方が「下京」の方よりも木戸が多いのではないかという事も、こういう関係から説明できるのではないかという事も申し上げました。

ここで越前の朝倉氏一乗谷についてみてみたいと思います。皆さん余り見慣れない地図かもしれませんが、現在の福井県福井市の南東の端にあります朝倉氏という大名の一乗谷城下町です。ここの城下町は、一乗谷とよばれる谷の中一面にこういうふうに建物群が立ち並んでいることで知られています。昨年の9月にとても大きな水害に遭って全域が泥につかってしまいまして、暫くは研究が進まないという状況にあります。

発掘もありますが、地名などをみていただきますと、朝倉館がここにありますが、周りに家臣団の名前らしい地名もあります。それからお寺を示すような地名もあります。家臣団屋敷も、決して朝倉館の近辺だけでなく、朝倉式部大輔というナンバー2か、ナンバー3の屋敷が別の所にポツン・ポツンとあるという状況にあります。全部掘ったわけではありませんが、家臣団の屋敷は谷の中にあちこち分散してある様子が分かるかと思います。

武家屋敷が分散している谷の中を、あとは何が空間を埋めているかといいますと、これは平井・川合殿の地区といいまして、一乗谷川を挟んで朝倉館の対岸に位置しますが、山沿いに綺麗に家臣団屋敷が並びます。その前に直線的な道路が走っているのですけれども、その道路を挟んだ反対側には、恐らく商人とか職人と思われる小規模な町屋群が点在しています。ここは今建物の復元がなされていまして、行かれますとイメージがよく分かると思いますが、家臣団屋敷の目の前に普通の商人や職人さんの屋敷が並んでいる様子があります。さらに赤淵・奥間野地区ですが、こちらの場合は余りに大きな武家屋敷はないのですけれども、それでも武家屋敷らしきものがあって、寺院みたいなものが奥まった所にあり、その前の道路沿いに恐らく商人とか職人のものと思われる町屋が立ち並んでいる状況がみられます。この状況は、先程の洛中洛外図屏風に描かれているような京都の戦国期の「上京」の状況に、ある意味よく似ているというふうに言えるのではないでしょうか。

豊後府内の例ですが、周りを町屋に囲まれてお寺が建っている所が何ヶ所かあります。こういう状況は、まさに先程朝倉の一乗谷にみたような状況に非常に近い。武家の邸宅、そして寺院、それから町屋群がパッチワーク状というか、ごちゃごちゃに入り混じっているという町の状況が分かるかと思います。

はっきり言いまして、戦国の城下町で明確に町の中の構造が分かるのは、京都をあえて城下町といえば、京都と、それからこの豊後府内と、一乗谷ぐらいしか実はなくて、それ以外の多くの城下町はまだまだ研究が途上ですので、よく分かりません。ですから、これが一般的だというのも逆にちょっと危険かもしれませんが、むしろ決して特殊ではない。豊後府内が京都に似ているというだけではなくて、こういうパッチワーク状の城下のあり方というのは、朝倉の一乗谷がこれまで典型的な城下町、或いは典型的な戦国大名と言われてきたのですけれども、

その城下町と見方を少し改めれば近いと言えるのではないか。もっと言えば、典型的な城下町、つまり大名の邸宅がドシンと真中にあって、その周りを家臣屋敷が固めて、そこから初めて町が始まるというのは、本当に戦国時代にあったのかという疑問にもいたるのでないかと思います。

それでは、こういうパッチワーク状の町並みが意味するものはいったい何か。それが交通とか、交流とか、そういう問題ではないか。

東国の大名がそういう交通というものを明確に組織して軍事的に利用するという政策をとったことは古文書等の資料から明らかです。しかし、近畿地方や西国では、中々そういう伝馬なんかという史料は見当たりません。東国の大名がどうしてそういう交通規制をしたかというと、東国の大名が強かったのではなくて、そうやって育成してやらないと育たなかった。それに対して、畿内や西国はほっといても物資を運ぶような人たちが動いている。物が運ばれている。だから、わざわざ大名が統制する必要がなかった。そういう世界でなかったのかと思っています。畿内の場合、さらに人や物が激しく動き回っていますので、畿内の大名はそれを規制するだけでよいのでないか。信長より前に近畿地方を押えていたのは三好という大名なのですが、三好の場合、城下町というようなものを造ってはいません。その代わりに堺とか、尼崎とか、兵庫という港町はきちんと押えています。こうした港町を押えることによって交通とか、流通を押さえさえすれば、別に城下町を造らなくてもよい。そういう方針だったのでないかと私は考えています。それが、つまり規制ということになります。それから一定の城下町を造って、そういうもの利用しようとする西国。さらに強力にバックアップしないと育成しない東国。このように考えたらどうかと思います。

朝倉の領国の場合、従来一乗谷という城下町が注目されました。確かに、先程紹介しましたように、一つの谷の中に様々な要素を入れ込んでいる。職人や商人も武家の邸宅の前に並べている。これはある意味、これを囲い込んで保護・育成する方針だと思います。これこそ典型的な戦国大名と言われてきました。朝倉の場合、越前国の府中という、もともと守護所が置かれていた今の武生という所が別にあります。それから、敦賀という日本海から物資が入ってくる港町があります。そういう所は、一乗谷を管轄するのとは別の部署、府中奉行とか、敦賀国司というのを置いて支配しています。それは、つまり一乗谷というのは朝倉氏の中でも特殊で、府中とか敦賀とか昔からの流通の拠点、或いは日本海を通る巨大な物流、それを一定のポイントでチェックし、上がりを儲けようとしていますが、別にそれ以上に何か養成したり育成したりするような手出しをしてはいません。畿内から西国の方はそれが普通だったという気がしています。さらにこの大友の場合、或いは山口の大内氏もそうですけれども、国際性というキリシタンの問題とか、半島や大陸、南蛮貿易の問題が入ってきます。それに伴う町づくりの開放性というのも、そこに結果していくのではないかと思っています。

こういうふうなことを、城下町というものを考える際に評価の基準と考えなければならない。戦国大名の性格を考える時に、こうした事を考えることなしに、なんでもかんでも統制し力をかけて育成していくのが良いのでなくて、従来からあるものを如何にうまく利用していくか、それを発展させていくか、押しいだくか、そうした大名のあり方もそれはそれで高く評価する必要があるのではないかと思っています。

【おわりに】

豊後府内の話にもどりますが、最近の発掘の成果や鹿毛さんの一連の研究によると、天正初年が豊後府内の都市改造に非常な大きな意味をもっている年らしいと言われてまいりました。しかし、この天正初年がどういう年かといいますと、まさに天正元年、1573年というのは、室町幕府が滅亡した年です。このとき、「上京」の大半が焼けてしまっています。さらに言うと、この前に既に足利将軍たち、義輝や義昭は、従来の花の御所を捨てて別の所にその中心地を置いています。従来の「上京」の花の御所を離れ、「上京」と「下京」を結ぶ通りの中間辺りに義輝とか義昭の御所、幕府が置かれるようになります。これは明らかに、「上京」という町だけでなく「下京」という町、この両方の町を押えてやろうという、全く新しい発想、動きを始めているわけです。つまり、もう洛中洛外図屏風の世界とは違う所に幕府が置かれ始めているわけです。このように京都が変質している時期に、大友氏は都市改造を行って、まるで京都風の町をそれから造り始めていくらしいということです。

ここで参考になりますのが上杉本の洛中洛外図屏風です。これがどうして描かれたか。残ったのか。どうして描かれたというのは色んな説がありますが、どうして残ったかはある程度明確で、これは織田信長が上杉謙信に贈ったからと言われています。どうして上杉謙信がこれを欲しがったかというと、それは洛中というものに対する憧れ。しかも洛中洛外図屏風に描かれた世界は、信長の時代の洛中ではなくて、まだ将軍が健在である失われてしまった都の姿を描いている。それに対する上杉の憧れを念頭において贈ったのではないかと言われています。さらにもっと遡って、越前の朝倉氏は洛中図というものを求めたと、断片的な史料ですが、言われています。

こういうふうに諸国の大名は戦国時代に洛中洛外図を求めて、洛中の様相を夢想するのか、もう少し現実的に考えるのかどうか分かりませんが、上杉氏は実際に都市政策を積極的に行っているような権力ですので、何か意味があるのかもしれません。最近、小耳に挟んだところでは、実は大友本「洛中洛外図屏風」なるものがあったのでないかという話もあるようで、これは半分冗談だと思いますが、しかし大友流の洛中図というようなものを大友宗麟なり、義統なりが描いたとしてもそれはおかしくはないのでないか。そこで、一つの理想都市としての洛中を描き出した。さらに言うと、この段階でそれを地上にもし実現できるとするなら、上杉の直江津では少し難しいかと思うのですけれども、既に山口の大内氏も滅亡しており、ある意味、唯一の戦国大名が大友氏だったのかもしれないなとも思います。都市の理想とか、理想の都市とかいうものを追求するような動き、それを洛中洛外図屏風というようなもの、もちろん大友本というのは現存しないわけですけれども、そういうもの中に半ば幻想かもしれませんが、求めてもそれほど間違いないのではないかと思います。

今はもちろん地上にその洛中洛外図の世界は無くなってしまいました。ある意味、島津氏に焼き討ちにあって無くなってしまったといえるかもしれませんが、その失われた洛中洛外図の世界がまさに地下から発見されつつあると言えるのではないでしょうか。京都という所は、その後の近世都市がのっかり、近代都市がのっかり、洛中洛外図屏風の世界がビビッドに現れてくることはまず期待できません。それに比べると、豊後府内の方は、これからどんどん発掘がされていく、或いは文献の研究が進んでいくと、もしかしたら戦国時代の京都の、或いは理想的な姿が浮かび上がってくるのでないかなというふうに、最後に期待を込めまして私の話を終りたいと思います。

府内屋敷　祇園御神領分之儀、
其方可有格護候、然者東之築地
至外通者、町人召移、以屋敷料
右社頭上葺等、可有馳走之由、尤
肝要候、仍諸点役之儀、令免許候
趣、巨細口上申候、恐々謹言
六月十一日　　義統（花押）
税所越中守殿

年　表

京　都		大友氏と豊後府内
1336	室町幕府成立	
1381	花の御所完成	
1467	応仁の乱勃発	
15世紀後半～16世紀前半		上原館の初源。四之大路沿いに家臣団屋敷？ 一の大路沿いに屋敷地
1536	天文法華の乱、下京焼亡	
1540年代後半		「御蔵場」の建設？
1550		義鎮（宗麟）、家督を継ぐ
1556		義鎮、政庁を臼杵に移す
1573	室町幕府滅亡、上京焼亡	義統、家督を継ぐ。府内が再び中心に 大友館の拡大整備
1578		耳川の戦いで敗北。宗麟、実権を義統に譲る 義統、府内の再整備
1582	本能寺の変	
1586	聚楽第完成	
1593		大友氏（義統）、除封
1602		近世府内城下町へ移転

資　料　収　集

資料収集委員会

1．会議

開催日　平成18年3月27日

場　所　歴史資料館会議室

議　題　(1)新委員委嘱状交付

(2)購入予定資料の審議

(3)その他（寄贈・寄託資料等について）

2．委員名簿

氏　名	役　　職	分　　野
後藤宗俊	別府大学文学部教授	日本考古学
菊竹淳一	九州大学名誉教授 九州産業大学芸術学部教授	日本美術史
豊田寛三	大分大学教育福祉科学部教授	日本近世史
段上達雄	別府大学文学部教授	日本民俗学
鳥井裕美子	大分大学教育福祉科学部教授	日欧交渉史

寄　贈　資　料

(1)故牧哲男氏古銭コレクション　375点　牧　克彦氏

(2)保定城突入之詩1点　西川　耕作氏

(3)柳行李1点　山本　弘子氏

(4)日本刀2点、槍1点　福田　邦子氏

(5)手斧1点　佐藤　秀雄氏

(6)珪化木1点　平野　清造氏

(7)軍隊手帳1点、年金恩給等の受給者心得1点、日露交戦東亜戦局大地図1点、応召袋1点、出征用日章旗1点、佐藤源平宛72連隊戦況報告書簡1点、佐藤源平戦況報告書簡1点、佐藤源平宛書簡1点、佐藤源平宛佐藤みつ書簡1点、金鵄勲章授賜証1点、金鵄勲章授賜通達書1点、勲章佩用心得1点、勲章年金受領者心得1点、戦役勲功金授賜証1点、消防組小頭任命書1点、徴集延期証書1点、飛行場用地代金差引内訳書1点、功七級金鵄勲章1点、勲八等白色桐葉章1点、明治37・8年従軍記章1点、帝国在郷軍人会会員章2点、帝国婦人会通常会員章1点、経雲婦人会会員章2点、大分仏教婦人会会員章1点、煙管1点　計27点　久保　貴義氏

購　入　資　料

(1)華南三彩刻花文六耳壷　1点

高33.0　口径14.2　底径15.5cm

胴部に花文、裾部に蓮弁文を線刻した華南三彩の六耳壷。全体に緑色の釉薬を施し、花文部に紫と黄色の釉薬がかけられている。中世府内町跡から同様の破片が出土しており、その全体像がわかる伝世品として貴重な資料である。

(2)青磁鎬蓮弁文碗　1点

高7.0cm　口径16.2　底径5.4cm

中国元末～明時代初めの青磁碗。碗の外表面に鎬蓮弁と呼ばれる蓮の花弁のような彫刻文様が施されている。同様の器形・文様の白磁・青磁が中世府内町跡から出土しており、その伝世品として貴重である。

(3)ミャンマー黒釉鋲文帯飾三耳壺　1点

高55.5　口径21.5　底径21.3cm

肩部に三つの耳を配し、胴部上半に褐色ぎみの黒釉がかけられたミャンマー産の壷。直立した口縁部を持ち、頸部周囲に白色粘土の貼り付けによる鋲状の文様を施す。胴部には平行線と鋲状文からなる肩部同様の文様が縦に八つ配されている。トゥングー王朝時代の16～17世紀にマルタバン窯で生産された。大友氏遺跡第3次調査で、同様の壷が出土しており、戦国時代大友氏の南蛮貿易の広がりを示す資料として注目されており、その全体像がわかる資料として貴重である。

(4)グレゴリオ聖歌譜　　4枚

縦36.0～52.0×横25.1～36.8㎝

ローマ・カトリック教会の儀式で歌われるグレゴリオ聖歌の楽譜。羊皮紙を用い、4～5線譜上に四角形の音符を置くネウマ譜と呼ばれる独特な方法で記されている。豊後府内教会では、1557年聖歌隊が組織され、オルガンの伴奏により聖歌が歌われていたことが、イエズス会の記録などに記されている。こうした楽譜をもとに聖歌の練習が行われていたのであろう。

(5)豊後国田代注進状案写　　1冊

縦23.2×横16.2㎝

豊後国内の荘園・公領の田地面積と領有関係などを記録した「豊後国図田帳」や「豊後国大田文」と呼ばれる土地台帳の写し。原本は豊後守護大友頼泰の指揮のもと税所小野朝臣幸直を中心とする国衙在庁官人らが作成し、弘安8年（1285）に幕府へ提出された。「豊後国図田帳」や「豊後国大田文」の写本は国内に29本確認されているが、本資料は「御注進状案」系（13本）の新出写本。蔵書印から江戸時代後期の儒学者朝川善庵　(1781-1849）の旧蔵品で、善庵の亡くなる嘉永2年（1849）以前に写された。「御注進状案」系写本は平林本・三浦本・宮内庁書陵部本に大別されるが、本資料は1本しか確認されていない宮内庁書陵部本系の写本であり、書誌学的な価値は高い。

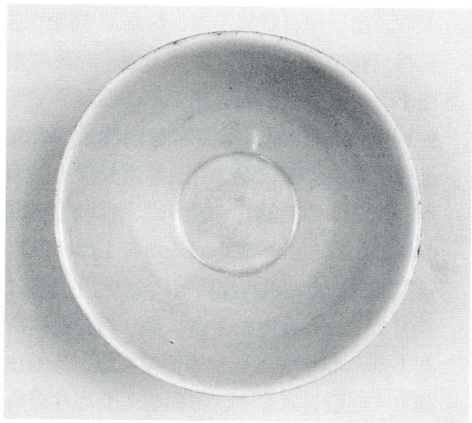
複製品製作

(1)マリア十五玄義図

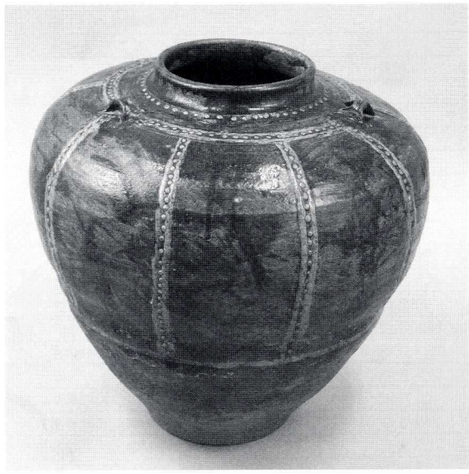
（原本　茨木市・個人蔵）

「マリア十五玄義図」は日本人の手になる初期洋風画として、また、わが国における初期キリシタン史の実相を明らかにしていく上で貴重な資料であり、日本におけるキリスト教及びキリスト教文化の広まりを理解する一助とするため、複製品を製作した。

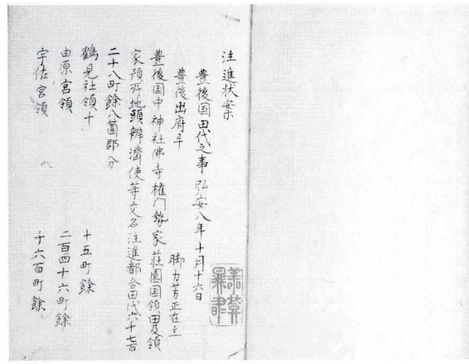
華南三彩刻花文六耳壷



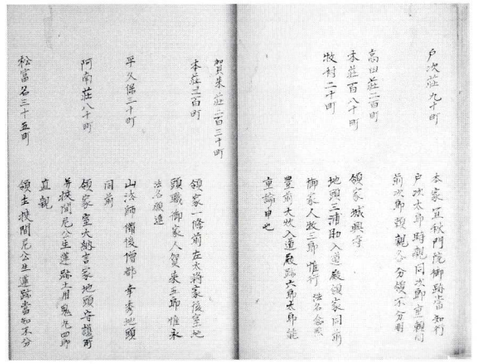
青磁鎬蓮弁文碗



ミャンマー黒釉鉄文帯飾三耳壺

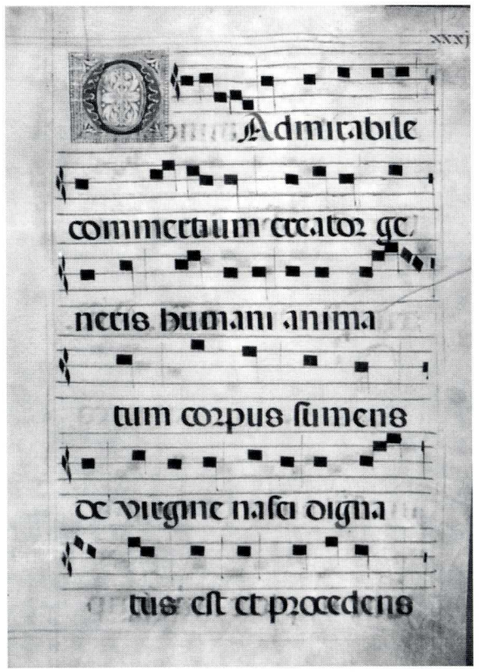


注進状案
豊後国田代文事　弘安八年十月十六日
豊後出府十　　勅力芳正在主
豊後国中神社佛寺植門勢家荘園国領田反領
家預所地頭辨濟使等文名注進都合田代十七箇
二十八町録八箇郡分
鶴見社領十　　十五町録
由原宮領　　二百四十六町録
宇佐宮領　　十六百町録



戸次庄九十町
本家宜秋門院御領国衙
戸次太郎明親同次郎宣親同
新次郎親観分分領不分明
高田荘二百町
末荘百八十町
牧村二十町
領家藤興寺
地頭三浦助入道殿領家同前
柳家人数三郎　惟行　法名念阿
豊前大炊入道殿六男太郎　能
重　論田也
賀来荘二百三十町
末荘三百町
領家一條前左大將家後室地
頭職御家人賀来三郎　惟永
法名願蓮
平文保二十町
山内御領後醍醐帝寄地頭
同前
領家室大納言家地頭寺龍前
美濃前司公主殿寄方用　鬼九四郎
直親
領主横間尼公主殿寄方用　鬼九四郎
松富名三十五町

豊後国田代注進状案写



グレゴリオ聖歌譜

マリア十五玄義図（複製）

旧佐賀関町所管の民具（民俗資料）

	名　称	地方名	員数	分類	縦(長さ)	横(幅)	高さ	最大径	記銘内容	備　考
1	網針	あんばり	1	漁労	14	1.5				糸が巻きつけてある
2	（ひっかけ）	ひっかけ	1	漁労	99.5	9				
3	（ひっかけ）	ひっかけ	1	漁労	117	8.5			（刻印）　フジイ	針先にかえしがついている
4	手網	しいで	1	漁労	130	34				
5	手網	しいで	1	漁労	142.5	46.5				
6	木銃（銃剣術用）		1	記念品	168	11			大中　後藤又夫	
7	櫓（オール）		1	漁労	92.2	8.7			■辺■子	
8	天秤棒		1	運搬	134.5	5			ふないや	
9	牡蠣おとし		1	漁労	70	9.2				
10	海老籠（えびかご）		2	漁労			17.7	39.5		
11	海老籠（えびかご）		2	漁労			22	32		
12	海老籠（えびかご）	びく	2	漁労			24.5	45		11とワンセットか
13	海老籠（えびかご）		2	漁労			20	33		
14	磯ざる		1	漁労			23.5	31.5		
15	竹篭（蓋無し）		1	漁労			15.5	20.5		海老籠と思われる
16	道具箱		1	漁労	32	24	21.5			
17	道具箱		1	漁労	34.5	28	23			箱の中に釣針等多数
18	道具箱		1	漁労	32	22.5	19			箱の中に釣針等多数
19	道具箱		1	漁労	32.5	19.3	22.5			箱の中に釣針等多数
20	停泊灯		1	漁労		23	45			
21	灯油入れ(火■と一緒)		1	漁労			10	10.9		
22	停泊灯の火屋（ほや）		1	漁労			26	7.5		
23	ランプ		1	漁労			31.2	17		ガラス部分に太陽の刻印
24	航海ランプ		1	漁労	11	13.5	15.3			
25	航海灯		1	漁労	18	18	23			
26	桙（かせ）		1	漁労	45	2	31			漁労用綱付き
27	蛸壺		1	漁労			30.4	21		底に穴２つあり
28	浮子（プラスチック）		1	漁労		23		18		
29	手桶		1	漁労			29.5	20.8		底に三の刻印あり
30	手桶		1	漁労			30	21		
31	蓋付き桶		2	生活用具	42.2		17.3			
32	手桶		1	漁労			28.5	25		底にも取っ手がある
33	油じょうご		1	生活用具			31.5	17.9		漁船での使用の可能性有り
34	ボストンバッグ		1	生活用具	45	32	28		佐賀関　後藤	
35	学生服（臼杵商業）		2	衣類	55.4	88.5				上下１セット(上着とズボン)
36	学生服		2	衣類	52	77.6			大中　一、五　後藤	上下１セット(上着とズボン)
37	海軍夏服		1	衣類	66	91.2				
38	予科練征服七つボタン		1	衣類	49.5	101				
39	海軍作業衣		2	衣類	70.2	119.5			■号洋第戦81號～	上下１セット(上着とズボン)
40	海軍作業衣		1	衣類	65.5	114.2				
41	駄菓子タバコケース		2	生活用具	21.5	15.5	29.5		Shohin-Chinretsubin～	T.10まで使用の記載あり
42	提灯入箱		3	生活用具	30	13.6	27.7			箱・蓋・提灯の３点セット
43	ガラス浮き		1	漁労	※117.2		26.5			縦＝ヒモの長さ
44	ガラス浮き		1	漁労	※40.5		28.5			縦＝ヒモの長さ
45	ガラス浮き・浮き袋・ビン浮き		1	漁労	※39.5		39.5			縦＝ヒモの長さ
46	笠（かさ）		1	衣類			8.5	46.2		
47	笠（かさ）		1	衣類			8.5	45.8		
48	高枕		1	生活用具	21	6.5	16			
49	手鉤（てかぎ）	打ちかけ	1	漁労	42	7.5				
50	足温器		1	生活用具	24.5	20	13.5			
51	タイガー計算機		1	生活用具	35.5	8.8	13		タイガーの記銘有り	かなりの重量がある
52	舵穴製作道具		1	漁労	27	18.2	1.8		二六	舵穴を作る時に丸くする道具
53	潜航板		2	漁労	32.2	13.5	3			
54	まな板		1	漁労	14.2	35.6	3.5			紐付き
55	煙突掃除用・たわし付棒		1	生業	472.5	13.5				
56	エンジン馬力・ハンドル		1	漁労	7.5	4.5	26			
57	シーズ金		1	漁労	35.5			7.5		
58	停泊灯（芯）		1	漁労	10.1	10.5	9.5			
59	磁石		2	漁労			5	10		60とワンセット

	名　称	地方名	員数	分類	縦(長さ)	横(幅)	高さ	最大径	記銘内容	備　考
60	磁石		2	漁労			4.5	10	住吉丸姪子屋　次■■	
61	舵穴製作道具		1	漁労	11.5	23.8	1.2		ニ四	52とワンセット
62	通し釘用穴あけ道具		1	漁労	31	3	1			
63	鉋		1	漁労	27	7.6	3			
64	かぶせ用籠		2	漁労	※15	※4.5				計測は葉形の分のみ
65	絹糸		1	漁労						
66	どんぐり（鉄製）		1	漁労	5	3			5	
67	ヤスリ		1	漁労	29.2			3		
68	スパナ		1	漁労	20.6	1.6				
69	漁具用鑿（のみ）		1	漁労	16.5			3.6		
70	海女師道具(水中眼鏡)		1	漁労	11	30.8				
71	船釘・ぬい釘		1	漁労	20	1.6	0.6			71～78までワンセット
72	船釘・ぬい釘		1	漁労	15.5	1.4	0.4			
73	船釘・ぬい釘		1	漁労	13.4	1.2	0.4			
74	船釘・かぶせ釘		1	漁労	9.5	1				
75	船釘・かぶせ釘		1	漁労	10.3	1				
76	船釘・かぶせ釘		1	漁労	10	1.2				
77	船釘・通し釘		1	漁労	15.5	3.5				
78	船釘・通し釘		1	漁労	19.5	4				
79	籠（道具入れ）		1	生活用具			10	37.5		
80	水中眼鏡		2	漁労	5	4	1.5			眼鏡を繋ぐ紐が破損
81	裁縫箱(端切れ、針入り)		1	衣類	34.5	20.5	18			端切れ多数、もめん巻しめ・大くけ箱入り
82	裁縫箱		1	衣類	28	16.5	20			
83	道中箱提灯		2	生活用具			8	19		白い棒が付属している
84	麻		1							計測値なし
85	水中眼鏡		1	漁労	12.5	6.5	6			計測は眼鏡部のみ
86	ふぐ道具一式		3	漁労						紐が３種類の材質
87	あじ道具		2	漁労					キチ■■■△レ■	紐が２種類の材質
88	錨元くさり		1	漁労	123	3				
89	網（漁具）		4	漁労						紐が３種類の材質・竹針付き
90	釣り用糸(テグス？)		1	漁労						計測値なし
91	網（漁具）		1	漁労						計測値なし
92	ヒモ（漁具）		1	漁労						計測値なし
93	網（漁具）		2	漁労						
94	桶		1	生活用具			51.8	35	大黒トメ	
95	桶		1	生活用具			54	40.5		
96	栓		7	生活用具			4	5.3	大のマークあり	
97	錨		1	漁労	33.5	5.5	99			
98	蛸壺（セメント製）		1	漁労	34.2	20	16			
99	飯櫃		1	食			26.8	36.4		
100	犂	コガラ	1	農耕	186.5	21.5	71			旧式のコガラ
101	鞴（ふいご）		1	諸職	77	29.8	43.5		記銘あるが判読不能	
102	水中眼鏡		1	漁労	4.8	3.3	2.3			計測は眼鏡部のみ
103	工具		1	漁労	21	4.5	1.3			造船関係用と見られる
104	糸（漁具）		2	漁労						紐が２種類の材質
105	漁具（？）		1	漁労						用途不明
106	漁具（？）		1	漁労	10.5	3	1			ヒモ付き
107	網（投網）		1	漁労	6.5	1.5			計測値は錘	錘の数は114（欠損部2)
108	網（投網）		1	漁労	4.5	1.5			計測値は錘	錘の数は160
109	ます網		1	漁労						
110	藻取り道具		1	漁労	149	56	4.2		下川キ(鉄部分に刻印)	
111	氷冷蔵庫		3	生活用具	60	43	67			庫内に竹製棚板が２つ
112	蔵の鍵		1	生活用具	18.5	8.5	0.8			

＊20番の記銘　WHITE LIGHT乙種白燈油第２種日船式第１流製B第1396號昭和35年９月製造　日本船燈株式会社
＊28番の記銘　DIA18cm Hi-zexFloot SANSHIN-KANKO CO.LTD
＊99番の記銘　大坂北久本樽金井池筋　平野屋

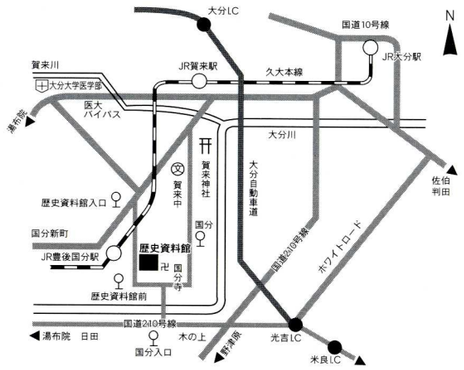
利　用　案　内

開館時間　午前９時～午後５時
（入館は午後４時30分まで）

休 館 日　毎週月曜日（祝日の場合は開館）
ただし、毎月第１月曜日は開館し、
翌火曜日が休館（祝日の場合は開館）
祝日の翌日（土・日曜の場合は開館）
年末年始（12月28日～１月４日）

観 覧 料　大　人200円（団体150円）
高校生100円（団体 50円）
中学生以下無料
＊団体は20名以上
＊特別展開催中は別料金となる場合があります。

交通機関　ＪＲ久大本線
○豊後国分駅下車徒歩２分
大分バス
○歴史資料館入口下車徒歩５分
国分新町ゆき



大分市歴史資料館年報
2006
発 行 日　平成18年７月15日
編集・発行　大分市歴史資料館
〒870-0864 大分市大字国分960番地の１
TEL(097)549-0880 FAX(097)549-5766